

### 1 経営的特徴と導入方法

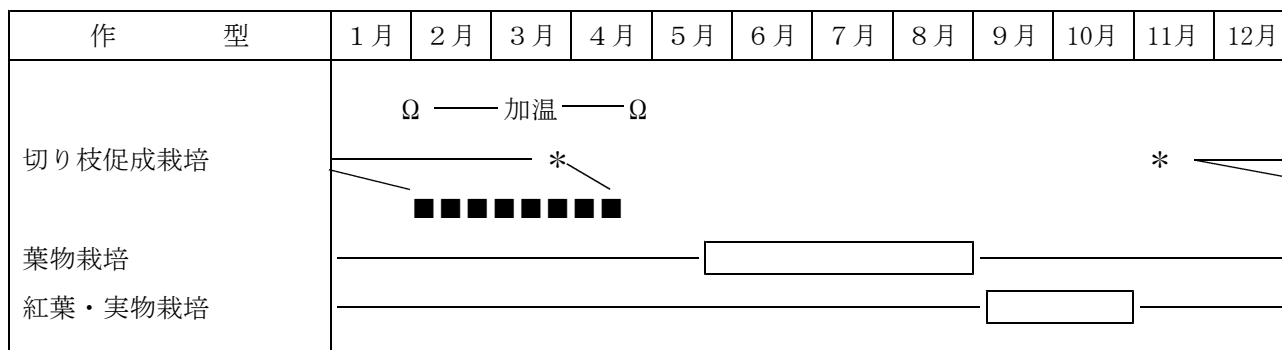
ナナカマドを切り枝として利用するのは、新葉物が主体で、紅葉物や実物はむしろ少ない。生育がやや遅く、1回の切り枝には3～4年を要し、茎や枝の曲がり重要視されているために山採りが多い。新葉物では促成を行う施設が必要である。

### 2 生理生態的特性と適応性

ナナカマドはバラ科の落葉高木で、その仲間は北半球の温帯から亜寒帯に生育している。我が国では、高冷地や東北地方が適地で、本州南部の温暖な地域では栽培が難しい。

開花期は5～6月で本年枝の先端から散房花序が出て白色の小さい花を多数つける。花芽が分化しなかった本年枝の生長点が肥大して花芽分化する。花芽分化期は夏で秋までに雌ずいが形成される。花芽は充実した短い枝に分化し、徒長枝には分化しない。秋になると休眠し、低温に遭遇しないと休眠が打破されない。休眠が完全に打破するのは1月以降である。

### 3 作型と品種



注) \* — \* : 切り枝収穫期間    ■■■ : 切り枝促成・出荷期間    □ : 収穫・出荷期間

#### (1) 作 型

- ア 切り枝促成栽培 ; 切り枝を促成して、芽吹き物として出荷する。
- イ 新葉栽培 ; 春から夏に葉つきの枝を切り出荷する。
- ウ 紅葉・実物栽培 ; 秋に葉、果実が着色したら出荷する。

#### (2) 品 種

ア バラ科、ナナカマド属、北半球の温帯から亜寒帯に約80種が自生しており、わが国には8種・6変種が自生している。

#### イ ナナカマド

秋の紅葉の代表で、落葉高木または低木、日本では北海道から九州まで広く分布し、サハリン、南千島、朝鮮半島にもある。欧米ではソルブスと称する。多くの種類のなかでも紅葉と果実の最も美しいもののひとつである。欧米では樹勢のおう勢な優れた品種が多数育成されており、「アスプレニホリア」、「エデュリス」等の品種がある。

#### ウ その他

我が国にはナナカマドの類縁のものとして、低木性の「タカネナナカマド」（本州中部以北）や「ナンキンナナカマド」（関東地方以西）、葉裏が白い「ウラジロナナカマド」等があるが殆ど利用されていない。



## 4 栽培

### (1) 繁殖

#### ア 実生

実生で多量の苗ができるが、実生苗は養成期間が長い。熟した果実を11月頃に採取し、果肉をよく洗い流し、少々水分のある状態でポリエチレン袋などに入れ、後熟のため、0～3℃で貯蔵する。3月頃に地床（1mの短冊床）にバラまきして、稲ワラなどで覆う。春に発芽してくる。

#### イ 接ぎ木

接ぎ木は切り接ぎで実生台に3月～4月頃に行う。

#### ウ 挿し木

挿し木は前年枝（休眠枝）を3月頃に挿すか、伸長が止まった新梢（緑枝）を6月～7月に密閉挿しする。

### (2) 定植準備

有機質に富んだやや湿り気のある土壌条件を好むので、有機質の施用、深耕等を行う。

### (3) 土壌改良、施肥

植え穴に堆肥を十分入れ、化成肥料を1本当たり50g程度施す。

幼木期には、10a当たり成分量で三要素を5～10kg程度を施す。

成木になったら、根の分布、枝の生育状況に合わせて施肥位置を決め、10a当たり成分量で三要素を10～15kgを鶏糞や化学肥料で施す。春に70%、秋に30%と分施する。春肥が多すぎると葉が大きくなり、葉

物や紅葉ものには不適になる。

#### (4) 定植

定植は3～4月または10月に行う。実生1年苗は30～50cm間隔の1～2条植えとし、1～2年栽培してから定植すると側根が発生し生育がよい。

植え付け間隔は、管理作業に機械が利用できるよう畦間2m、株間1.5m、10a当たり330株植えを目安とする。

#### (5) 定植後の管理

植え付けたら、支柱を立てて、直立幹に仕立て、1.5mくらいから枝分かれをさせる。

定植後3～4年は除草、施肥など十分な肥培管理に努める。特に夏は、樹冠下の乾燥と地温上昇を防ぐため堆肥、稲わら、刈草等でマルチする。

### 5 主要病害虫とその防除対策

#### (1) 病害

赤星病、うどんこ病、すすかび病、葉腐病、同枯病などが報告されている。

#### (2) 虫害

ハダニ類等が加害するが、他の害虫も含めて県内では不明な点が多い。

### 6 収穫・促成・調製・出荷

#### (1) 収穫

ア 収穫は良枝を間引き切りにして行う。間引きは、全体の枝数の3分の1程度に抑える。半分以上間引くと計画的な年次出荷ができなくなるだけでなく、樹勢を衰えさせることになる。

イ 促成物は1月出荷の場合には10月中～下旬に、2月以降の出荷の場合には11月から3月頃に切り枝する。葉物は5月頃から、紅葉・実物は9月～10月に収穫する。

#### (2) 促成

ア 切り枝は雪の多い地方では11月から降雪まで行い、そのまま雪の下に入れておく。雪の少ない地方では、その都度切り出しを行う。なお、1月出荷を行う場合には、低温貯蔵による強制休眠打破が必要で、2℃の8～9週間冷蔵が有効である。

イ 促成は、1.3m程度のもの5～10本を束にして一度切り戻してから2～3日水揚げし、入室する。

ウ 夜温は15～20℃、昼温は20～30℃とし、促成日数とのかねあいで温度を設定する。湿度は70%以上とし、1日1回～3回シリンジ（散水）する。

エ 低温要求の満たされた葉芽の光周反応は明らかに長日条件により促成日数をわずかに短縮し、芽の伸長生長を助長する。しかし、実用上は短日とさほど差異がなく、休眠の打破された条件では顕著な光処理の効果は認められない。

オ 促成期間は、休眠打破が進むにつれ、また陽気がよくなり促成温度が高なるにつれて短縮される。促成期間は設定温度によって異なるが、1月出しで30日程度、2月出しで15日～20日、3月出しで7～10日、4月出しで5～7日程度である。

カ ほう芽及び展葉は、主枝・側枝とも頂芽優勢の傾向が強く、枝先からはじまる。

キ 仕上げは低温室で3～5日慣らしを行うのがよい。

### (3) 調製・出荷

ア 実物以外は、1.2m～1.3mの長さを基準として10本を1把、5把を1束、4束をまとめて1梱包とする。

イ 出荷は段シート包装または段ボール箱で行うが、芽吹き物は新芽が伸び始めたところに、1把単位にポリエチレンフィルムに包んで出荷する。

## 7 せん定・仕立て

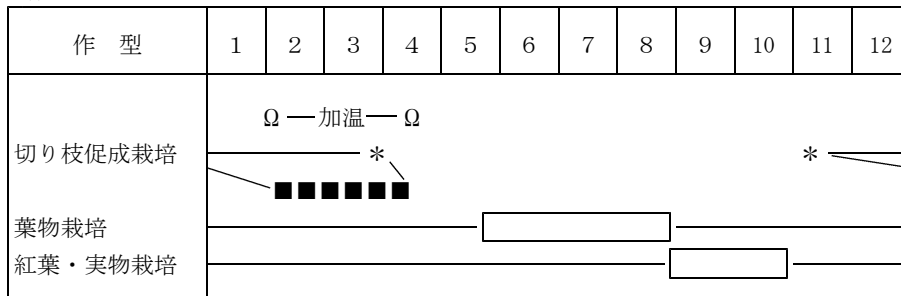
主幹形とし、せん定は行わず放任する。

### 参考・引用文献

- 1) 長野県、長野県農協中央会、長野県経済連「花き栽培指標」、(平成5年)
- 2) 花岡喜重「新特産シリーズ-枝物-」、農産漁村文化協会(平成10年)
- 3) 「朝日園芸百科18 庭木編Ⅱ. 低木・実物」、朝日新聞社(昭和60年)
- 4) 山形園試、福島農試いわき支場、宮城園試「寒冷地における枝物花木の栽培と促成技術の確立」(総合助成試験成果)(昭和56年)

# ナナカマド栽培ごよみ

月	旬	生育状況	作業	栽培の要点	摘要
3	上		(は種)	1 作型	
	中				
4	上		(定植)	2 品種 ナナカマド	
	中				
5	上	展葉期	葉物出荷始め	3 繁殖	
	中				
6	上			(1) 実生：熟した果実を11月頃に採種し、果肉をよく洗い流し、少々水分のある状態でポリエチレン袋などに入れ、後熟のため0℃～3℃で貯蔵し、3月頃に育苗箱にバラ播きする。	
	中				
7	上	開花期		(2) 接ぎ木：切り接ぎで実生台に3～4月頃行う。	
	中				
8	上			(3) 挿し木：前年枝（休眠枝）を3月頃に挿すか、伸長が止まった新梢（緑枝）を6～7月に密閉挿しする。	
	中				
9	上		紅葉物、実物	4 定植準備、土壌改良、施肥	
	中				
10	上	紅葉期	出荷始め	5 定植	
	中				
11	上			(1) 時期は3～4月、または10月に行う。	
	中				
12	上		促成用	6 定植後の管理	
	中				
1	上		切り枝採取	(1) 植え付けたら支柱を立て、直立幹に仕立て、1.5mくらいから枝分かれさせる。	
	中				
2	上		促成・出荷	(2) 定植後3～4年は除草、施肥など十分な肥培管理に努める。	
	中				
3	上			7 収穫	
	中				
4	上			(1) 収穫は良枝を間引き切りで行う。間引きは全体の枝数の3分の1程度に抑える。	
	中				
5	上			(2) 促成物：10月中～下旬（1月出荷向け）、11～3月（2月以降出荷）	
	中				
6	上			葉物：5月頃から	
	中				
7	上			紅葉・実物：9～10月	
	中				
8	上			8 促成	
	中				
9	上			(1) 1月出荷を行う場合は、2℃で8～9週間低温貯蔵して強制的に休眠打破した後に促成する。	
	中				
10	上			(2) 規格別に束ね、2～3日水揚げしてから促成する。	
	中				
11	上			(3) 昼温20～30℃、夜温15～20℃、湿度70%以上、1日1～3回シリンジ	
	中				



\* - \* 切り枝収穫期間、■■ 切り枝促成・出荷期間、□ 収穫・出荷期間